

# 信州読書会 YouTubeLive&ツイキャス読書会

## 課題図書 森鷗外 『ヰタ・セクスアリス』

信州読書会では、毎週、YouTubeLive とツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。

(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

YouTubeLive <https://www.youtube.com/channel/UCaJK5OLmeEYI97oBQigdcgw>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから [http://bookclub.tokyo/?page\\_id=714](http://bookclub.tokyo/?page_id=714)

今後のツイキャス読書会の予定です。 <https://note.com/sbookclub/n/ndcfa96fad284>

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf>

(各回の感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張ってあります。)

森鷗外

『ヰタ・セクスアリス』



第 305 回の YouTube 読書会の課題図書は、森鷗外 『ヰタ・セクスアリス』です。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

[青空文庫 森鷗外 『ヰタ・セクスアリス』](#)

[朗読しました。](#)

## AIDMA 的アプローチ

発刊された時代では衝撃的だったのだろうか。しばらく発禁であったとのこと。

この作品は、主人公・金井(実は鷗外?)の性的欲求の変遷が書かれている。

顧客マーケティングを仕事としていた自分にとって、その内容はいわゆる「性欲の AIDMA(アイドマ)的アプローチ」であるように思う。

AIDMA とは顧客が購買に至るまでの心理的変化のことをいう。

A=Attention(注意; おやっ)→I=Interest(興味; 面白そう)→D=Desire(欲求; ほしい)

→M=Memory(記憶; 忘れられない)→A=Action(購買; 買っちゃおう)という流れになる。

例えば、幼少期に受けた「小原のおばさんから見せられた春画」や「草履を作っているじいさんの言葉」が Attention になる。子供心に不思議に感じたことだろう。

その後、少し大きくなって「蔵の2階で発見した春画」「家従との徘徊」が interest。性に対する知識・興味ともに増え始める。

そして学生生活は主に Desire から Memory である。

このタイミングは、消費行動でいうと買うべきか買わざるべきかと迷うタイミング。

この作品では、女性に対して抱く悶々とした思い、過敏となる心理や性的葛藤が特に面白おかしくあらわされていた。

最後の Action。金井の場合は、無事ソフトランディングできたようだが、中には Action の方向性からその後の人生に支障がでたものもいたようだ。

金井の場合は、女性を知って男性としての自信がついたことで、性欲をうまくコントロールすることができるようになった。

そのことを意味する「性欲の虎を馴らして抑えている。馴れた虎を傍らに寝かし置いている」(新潮文庫 P.127)という表現は興味深い。

まさに当時の青年にとって(今でもそうかもしれないが)、性欲とは「虎」に匹敵するものだったのだろう。

こうしてみると、「風俗壊乱ノ廉ヲ以テ発禁トス」というのもわからなくはないが、少し視点を変えると、文学作品以上の面白さがあるように思うのだが。

(おわり)

## 『牛夕・セクスアリス』 感想文

題名から猥褻禁断の香りがしていたけれど、超優等な金井くんの少年時代が、清潔なタッチで描かれていた。

自伝のように書かれており、たくさん林太郎くん情報を収穫できる貴重な作品で、引き込まれるおもしろさだった。

激渋番長鷗外が子供の頃、お花を摘んで捨ててみたり、大人に性をチラつかせられ、翻弄されるシーンや、机の下の最中(モナカ)事件。色々キュンとさせられたのは、最近よく鷗外の作品を読んでいたせいかしら。と考えた。

「少年視」され襲われる。布団蒸攻撃から逃げ出すついでに、書物とインク壺をさらったのはなんだったのか、可笑しかった。

そしてこの坊やが永遠の不平家になると『妄想』してしまった私は、またキュンした。『妄想』は、世捨て人のような翁の、心の寂しさや弱さのようなものがストレートに語られていたけれど、心地よい文章が詩的で、端的で、スクリーンを見ているような不思議なきもちになれて、迷宮で好きだ。鷗外の根底には哲学がある。

dub を受ける前も後も、浮かれない、自制心ある俺。をアピられるとハイハイと思いつつ、どこまでも貞操を大切にする姿勢を貫けるのは、鷗外のなせる技かもしれないと感じた。

鰐口ユジくんは1番いっちゃってたけど、こんな男がモテたりする。dub を受けた際、秒で脱がせたやり手の中年増はやがて『眠れる美女』の館を経営しそう。

ところで、この作品は「白い上に黒く、はっきり」自分の性欲の歴史を書くという宣言から始まるその序説が長い。金井くんは、自国の自然主義文学がもてはやされているのに不満がある。自然主義文学に見た、厭なものを色々語ってくれたけれど、はっきりと分からなかった。

超理性の人、金井湛は「性欲の虎を放し飼いにしているやつら許せないキオが憎い。」なんて言っていないけれど、実際鷗外は自然主義文学に異を唱えていたと知った。そうなる、この作品は挑戦状なのか、そしてこの作品は自然主義文学になるのかしら。という疑問が起こる。線を引くのは難しい世界だと思った。最後の投げ遣りがいい。

もしこれが鷗外の自然主義文学への一石だとしたら何かしっくりこないような気がしたから、本文にもある「息子へ」の物として見た。すると、とてもいいと思った。どこか優しさを感じる内容だったし、とても面白くて、教育的でもあった。鷗外のおちゃめさと純心も感じる。甘い夢の部分もあって、コンプレックスのようなことも書いてる、てんこ盛りの作品だったから。

自己弁護という罪名、芸術品も人生も全てあらゆるものは自己弁護..砂の上のカエルが砂色なのも自己弁護..情熱という言葉がなかった時代..批評という発明もなかった時代..こんな興味深い言葉もあったけれど、1番私が言いたいのは、「鷗外の見つめる美男はいつも心憎い。児島君の橋鮎は Musagetes」

(おわり)

※ Musagetes=導きの神

## 『中々・セクスアリス』 感想文

読む前はすごい事が書いてあるかもしれないと、勝手に思い込んでいましたが私の思ってたのとは違って面白い所もあって読む事ができて良かったです。

色々面白いと思うところはありませんでしたが一番は

(引用 はじめ)

僕も最初から女を置くということには反対していたが、鼻を垂らして赤ん坊を背負っていたのを知っている、あのお蝶なら好かるうというので、同意した。

お蝶は朝来て夜帰る。むくむくと太った娘で、大きな顔に小さな目鼻が附いている。もう鼻は垂らさない。

(新潮文庫 P.86)

(引用 おわり)

「もう鼻は垂らさない」って、その程度にはお蝶も成長したという事かもしれないけどわざわざ入れた一文がすごく面白くて印象に残りました。

お蝶は女性として見て貰えていないのは気の毒だけど、誰に対しても少し冷淡なところがあるのかもしれないなと思いました。

鷗外先生にとっては女性よりも勉強の方が大切だったのかな？ と思いました。

家が裕福だったから望めば何でも学べるという環境もあったかもしれないけど、でも自分から親に頼んで学びたいと言うのはすごいなと思いました。

自分と比べたら申し訳ないけど、親に頼んででも何かを学びたいと思ったことは無かったなと少し反省しました。

『舞姫』を以前読んだことがあったので鷗外先生は女性にモテモテできっと酷いこともしたりしたのかなと思っていたので意外な一面を知る事の出来る作品だったなと思いましたし、他にもまだ読んでいない作品があるので読みたいなと思いました。

(おわり)

## 『中々・セクスアリス』 森鷗外 感想文

姪が小さい時、散歩の途中に「あ、蜻蛉が交尾している！」と言った。さすがにドキッとしたが、こういう風に真っ向から教えてもらっているのだなと、何だか新鮮に感じたのだった。

この作品は、哲学を仕事としている金井湛という人物の、六つから二十一歳までの、「性欲」の歴史が描かれてあるのだが、周りの人物が飛び切り個性的なので、明治 40 年辺りの風俗と共に驚かされた。

十年以上前に、「性って何！」という本の著者である高柳美和子さんの講演会を聴かせていただいたことがある。

「世の中に溢れ出てるポルノシャワーを浴びる前に、しっかりと性について教えなければならない。何も知らないままで、あまりの自分の性欲の強さに、悩み、相談してくる高校生などの男の子が大勢いる」と。

「朝会社へ行く電車で、経済新聞を読んでいたビジネスマンも、帰りにはスポーツ誌を読んでいる」、

「精子 2~4 億個で卵子と出会えるのはわずか 60~100 個だけであることを考えると、ものすごい性欲がないと、とても辿り着けないのだから、心配しないで」との優しいメッセージを思い出した。

(引用はじめ)

「人間は容易に醒めた意識を以って子を得ようと謀るものではない。自分の胤(たね)の繁殖に手を着けるものではない。そこで自然がこれに愉快を伴わせる。これを欲望にする。この愉快、この欲望は自然が人間に繁殖を謀らせる詭謀である、餌(え)である」(新潮文庫 P.21)

(引用おわり)

欲望は自然が与えた計略、企みであると、だから愉快を伴わせるというショーペンハウアーの言葉が、「心配しないで」という高柳美和子さんのメッセージに繋がった気がした。

六つで笑い絵(春画)を見たり、嫌らしく父母の夜を匂わせるお爺さんなどに、ことごとく嫌悪を覚える金井少年、二枚舌の涅槃(くりそ)の大人の濁りも見抜き、諸先輩の硬派(男色)の誘惑にも自力で身を守った。

吉原に行くことに抵抗したり、茶屋の芸者と腕相撲をする姿は、年齢ごとの体験には性欲の溺れはなかったと、欲望、性欲に帰着しなかったというその細かな叙述が、その時代に発禁にまでなった小説への、わずかな「自己弁護」であったような気がしてならなかった。

「僕はどんな芸術品でも、自己弁護でないものは無いように思う。それは人生が自己弁護であるからである」(P.107)

この言葉には納得してしまった。

曝け出しながらもプライドを保ち続けているような鷗外先生の姿が感じられたのだ。

恋愛を離れた性欲は、情熱のありようがなく、自叙に適せない。

少年の時から、自分を知り抜いていて、悟性が情熱の芽ばえを枯らしてしまった、と書かれてあった。

それはそれで伶俐すぎるのも淋しい気がしたのだが、

最後の

「永遠の氷に掩(おお)われている地極の底にも、火山を築き上げる猛火は燃えている」(P.127)

金井(鷗外先生)の心には情熱はしっかり息づいていたという最後に辿りついて、全体が見えた気がしたのだった。

性への知識のない者に、この本を推奨するかと問われれば、私はきっと「しない」と答えるであろう。

それは結婚するまでに「dub」を受けずにいた方が良かった、と語る金井の言葉に似ているのかな。

(おわり)

# 金井びんびん物語

本書『中タ・セクスアリス』読後の乃公、愚にもつかぬ雑感以下に編み出したり。

## ▼あらすじ:

この小説を端的に申せば「リビドー全開マカパワー爆発エレクト金井のびんびん物語」である。

## ▼読書感想文:

びんびん物語の「びんびん」の意味が分からなかったので同僚の女性社員に聞いてみます。

[感想文・完]

## ▼余談 ～ 子を持つ親御さんへ ～:

本書は金井が六歳～二十一歳までに経験した性欲に関するエピソード集である。そのため、金井と同様の経験をした男性諸氏も多く存在するものと思われ、それは作中の言葉を借りれば、Dub(非童貞)、Non-Dub(童貞野郎)に限らずである。そこで今回、金井七歳時のエピソードと類似の経験をしたことがそういえば私にもあったので、恥をしのいで以下に申し上げます。

## ◎金井七歳時のエピソードの抜粋:

<<じいさんが僕にこう云った。「坊様。あんたあお父とっさまとおっ母かさまと夜何をするか知っておりんさるかあ。あんたあ寐坊じゃけえ知りんさるまあ。あははは」じいさんの笑う顔は実に恐ろしい顔である。—中略— じいさんがそんな事を言ったのは、子供の心にも、profanation である、褻瀆(せつとく)であるというように感ずる。>>

上記は要するに「近所のじいさんが金井に SEX の存在をからかいの意図を込めてほのめかし、それを受けた金井少年は訳も分からずに神聖なものだけが汚されたような感覚になったよ」という場面であり、この不思議な感覚は幼少期の私にも覚えがある。で、それは以下。

## ◎私のエピソード:

私が三歳の頃、母が鏡台の前に座って何やらゴソゴソしていたので、一体何をしているのかと思った私は背後から母を覗き込むと、指輪やネックレスといった宝飾品を台上に並べて、それらを装着しては眺めて外してはまた別の指輪を装着したりと忙しそうにしていたが何やらご満悦な表情すら窺えたため私は、キレイな指輪だねーと率直な感想を述べたところ「綺麗でしょ」と母は答えた。買ったの?と尋ねると「もらったのよ」と言うので、「パパにももらったの?」「違うよ」「おじいちゃんにももらったの?」「違うよ」「おばあちゃん?」「違うよ」「じゃあだれにももらったの?」「アンタの知らないオトコ」と答えた母はニヤリと含み笑いを浮かべたのである。

といったことを考えながら、こうして私も金井と同様に、母という女性の Sexual で Prostitution 的な笑みに Profanation を覚えたわけだが、この感想文で私が最も言いたいのは「子を持つ親御さんへ。子供って親の発言を意外と覚えてるから変なコト言わない方がいいよ。」である。以上

(おわり)

※Prostitution=娼婦 Profanation=瀆神



## 本人にとってはまんざらでもないというクソダサムーヴ

正直に感想文を書くとしたら、私は私の『キタ・セクスアリス』を語ったほうがいいのだろう。しかし、有料だったらまだしも、無料で、自分の性癖を暴露するというのは、私には、シラフで裸ダンシングするみたいで、やりきれないのである。

それはともかく、エロへの探究心と、哲学的なものへの探究心は、殿方にとって同根であるというのが、私の持論である。殿方は、エロに倦むと、反動的に哲学を求めだすのである。獣欲への自己反省が、形而上学への触媒となる。

だからこそ、恋愛は、このエロと哲学への探究心が複雑に絡まりありあったものになるのである。恋愛をしていて、哲学的にならない殿方はいない。恋愛には、まず、相手を神聖視するという理性的な頭の働きを伴う。相手を性欲の対象としてしか見ないなら、理性は発動しないし、哲学も黙しているだろう。したがって、肉欲を超えたところで、相手との関係を客観的に考えるようになれば、哲学のはじまりである。

恋愛は、恋愛対象とともに自分自身を明晰化しようとする営みである。このいいかたは、いささか抽象的すぎるので、具体的にいえば、恋愛によって、相手を神聖視しはじめると、自分のなかに、虚栄心がむくむく鎌首をもたげてくるのである。

鷗外は、この作品のなかで、虚栄心のことを『dub』（＝殿方が男性の自尊心を満たす）と表現している。オスの本能は生殖に伴う肉欲であろうが、それだけ満たしても、人間に固有の dub は満たされない。恋愛に伴う虚栄心は、他人に羨ましがりたいという顕示欲や、顕示欲が満たされることによって得られる自尊心に関わっている。

この虚栄心の具体的な中身は、ドイツ留学中に、地元のチンピラの情婦である『凄み掛かった別嬪』にトイレまで追っかけられてチューされて、ランデヴーしちゃって、相手は金目だったけど、同僚には、金目だったというのは黙っていて、あの女とやったと自慢だけした、という、よく考えればずっこけエピソードだが、本人にとってはまんざらでもないというクソダサムーヴのエピソードによく表れている。

これは、よく考えれば、金髪のおかんご頂戴したら同国人の度肝を抜いて、優勝じゃん、みたいなマウンティングで、痛々しいし、単なるアジア人の西洋コンプレックスの裏返しであるが、鷗外先生がそこに気がついていないわけがなく、それでも書いているとしたら、鷗外先生のそこをあえて書いたクズっぷりが、逆に、微笑ましいのである。

外国での虚栄心は、鷗外先生のノイグールデ（好奇心）のためにどさくさ紛れに正当化されるのである。

読者は、そこを突っ込むべきだろう。本人にとってはまんざらでもないというクソダサムーヴのエピソードだ、と。

これに似た虚栄心を、日本人女性との関係で書けば、いきおい鷗外もディオニュソス的にならざるを得ない。でも、社会的立場があるから鷗外はこのへんで止めておいたのだろう。ただ、『青年』にはそのへんの虚栄心にまつわる苦悩がフィクションとしてしっかり書いてあった。（ラストの未亡人とその情人と青年の三角関係に）

まあ、しかし、同じ男だから、なんとなくわかるような気がするが、手加減して書いている。ドイツでのクソダサムーヴ以外は、わりかし、誠実に等身大の性生活を描いている。それでも、『舞姫』にかかれた太田豊太郎の卑怯なクズっぷりのほうが、この性生活の告白よりもズシンと来る。『舞姫』の主人公は、日本での出世のために踊り子を捨てたのである。鷗外先生、本質的には太宰治くらい自己正当化が激しそうだが、専業作家ではないからか、あまりバレていない。

（キタ・セクスアリスとは、俺、わりいけど、ドイツではモテたから、ということだったのだ）

（おわり）